
マリアノイズ

和泉紀伊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マリアノイズ

【Nコード】

N90340

【作者名】

和泉紀伊

【あらすじ】

クレーム処理に追われる沢渡藤花のもとにかかって来た クジラを名乗る女性からの一本の電話。そして鯨を愛する大学教授、城戸貴春は抗がん剤を拒む元教え子 久遠深月 のもとを訪れる。二人が交互に語る、鯨を介した祈りの物語

沢渡藤花？

【沢渡藤花】

バスが桜並木に差し掛かる頃、乳児の激しい泣き声で目を覚ました。

男性に抱かれた子供は母乳を求めているが、どうやら若い母親は人前での授乳をためらっているようだ。しきりに子供が手を伸ばすが、届く筈もなく、ただ力いっぱい泣き喚くばかりである。

顔をしかめる乗客の視線に耐えかねた母親が子供を受け取り、言い聞かせながら慌ててあやすけれど一向に泣きやむ気配はない。その光景に沢渡藤花は二ヶ月前、まだクレーム処理に終わっていた時のことを思い出す。

男性が着ていた白いロングコートを脱ぎ、子供に覆い被せるようにそっとかけた。コートによって人の目を気にすることもなくなり、安心して母乳を与え始めた。先ほどの騒ぎようが嘘のようにやむ。妻の体を他人の目に触れさせたくないという思いが彼にもあったのだろう。

彼の気遣いや機転に感心し、ラジオ番組にその出来事をメールで投稿しようと思い立って携帯電話を取り出す。今までにもこまめに送っていたけれど、読み上げられたことは一度も無い。それでも自分が無駄なことをしているとは決して思わなかった。

打ち終えるとシートに深く寄りかかり、退屈な移動時間をラジオでも聴きながらやり過ごそうとイヤホンを付け、周波数を合わせる。『オーシャン・レディオ』のパーソナリティを努める女性の声は砂嵐のようなノイズの中でも、すぐに聴きとれた。ゆっくりとダイヤルを回してクリアに聞こえるまで調整する。周波数を合わせる作業が藤花は好きだった。

バスは桜吹雪の中を走っている。

城戸貴春？

【城戸貴春】

『久遠深月』という名札を確認し、城戸貴春はノックをするやいなや返事もろくに聞こえぬうちに病室に入る。

部屋の白さはまだ何も描かれていないカンバスを思わせた。色鮮やかな紅葉と、そのささめきに耳を傾ける彼女の姿はひとつの景色のようで現実味というものがない。気がついた深月が振り返らなければ、ずっと眺めていたのではないだろうか。

「君の父上に君を説得するように頼まれてね。実に迷惑な話だ。少しは父上の気持ち察したまえ」

普段から彼の声は高圧的で抑揚がないことで有名だが、いつにも増して低く重い。

深月は胎児への影響を理由に抗がん剤を拒んでいるらしい。そればかりか相手の男性さえ明かそうとしないのだという。そこで彼女からの信頼も厚い城戸が呼ばれることとなった。

しかし、説得する気など毛頭に無い。無駄だとわかっていた。少なくとも城戸の知る彼女は融通の利かない頑固な側面を持っている。ストップです、と言われて足を止める。

「そこまでが私のテリトリーですよ、教授。お元気そうでなによりです」

「病人に健康を心配される筋合いはないよ。実に不服だ」

古い話をよく覚えていたものだと思える。城戸にすれば世界は雑音に溢れている。人の話し声すら聞くに堪えず、講義を終えて研究室に戻るとザトウクジラの鳴き声を聞いて安らぎを得ていた。

彼の安息はいつもノックによって邪魔される。所用で訪ねて来た事務員にすら彼は顔をしかめてみせた。不快感を覚えながらも入らせると、ゼミで見覚えのある女学生であった。

部屋を見渡した彼女は開口一番に鯨がお好きなんです、ね、と言っ

た。確かに、一目でわかるほど城戸の研究室には鯨に関係した資料が溢れている。

「どんな動物にもテリトリーはある。勿論、ヒトにもだ。自分のテリトリーの中くらい私の自由があっても何ら問題はない筈だ」

その後も彼女が、マリンスノーを鯨も眺めるのかなどといった生産性のない質問を繰り返すことに苛立ちが募っていく。一体、何を求めているのかさっぱりわからなかった。雑音以外の何ものでもない。

「鯨の何がそんなに好きなんですか？」

城戸の心内に反して彼女の声は明るいこともまた彼をかき乱す。独りにして欲しかった。

「どんな生物でも生まれてきて最初にすることは決まって呼吸だ。彼らは海面に上がって、息をする。まるでこれから生きていくことを天に告げるように。祈りだよ。鯨は祈るんだ。あの雄大な姿に強く惹かれた」

痺れを切らし、「もういいだろう、用が無いなら帰ってくれないか」と言いかけた時だ。じゃあ、と顔を綻ばせて城戸の瞳の奥を覗き込む深月の姿がそのまま焼き付く。きっと生涯忘れることはないだろう。

「その祈りに応えてくれるのは、誰ですか」
実に心地よい雑音だった。

沢渡藤花？

赤ちゃんが泣き止まないからどうにかしてほしい、という冗談にしか聞こえないような苦情の電話に藤花は頭を抱えていた。一人でも無碍に扱えば、いつしか会社の信用を貶めることに繋がりがねないことも理解しているので耐えるしかない。転職も考えていた。

手に負えず、上司を見やるが備え付けのテレビで天気予報を見ていて、とても役立ちそうにない。簡易な日本地図のところどころに雪のマークがあった。画面は移り変わり、去年の四月から続く連続婦女暴行事件の経過をキャスターが伝える。

テレビと言えば以前、雑誌で読んだノイズを聴かせる方法を思い出し、提案する。母親の胎内で聞こえた血流や心音を思い出さうしい。

それでもしつこく、なおも散々何の根拠があるのかと問い質した挙げ句、文句を言うのにも飽きたのか相手は一方的に電話を切ってしまった。

一息吐く間もなく、すぐに次の呼び出し音が鳴る。避妊についての問い合わせだったりしたら、次こそは切ってやろうという意気込みすら芽生えていた。

「私、クジラという者ですが」

厄介そうだと思い、手元の水を一口含んで喉を潤す。真冬の空気を溶かし込んだように冷えている。

彼女の話 요약すると、妊娠している彼女は癌で死ぬが、せめて子供だけは産みたいのと言う。冷静に考えると荒唐無稽にも思える。

今までにも悪戯や、同情を引こうと長々と自分の身の上話をしてきた人間はいくらでもいたし、同じ数だけあしらってきた。馬鹿らしいとつくづく思う。

けれどこの仕事を始めてから、猜疑心ばかり強くなっていくのを

感じるのも事実である。

た

「信じてくれなくても構わないんです」

ただ、と言葉が詰まる。辛いんです。そうクジラは続けた。

「今までずっと一緒にいてくれた人には当分逢えません。多忙な人だから。でも誰かに傍にいて欲しくて。つまり」

私は誰かと繋がっていたい。消え入りそうな声を聞いて、藤花はこれは同情ではないと自分に言い聞かせながら、受話器を置く手を止めて耳に当てる。

「はい。ただいま担当の者が外しておりますで、わたくし、沢渡が代わりに伺わせていただきます」

良いから続けて、聞くだけだからねと小声で念を押す。

「申し訳ありません。それにつきましては、当社では責任を負いかねますので、ええ、承知しております」

周りには気付かれていない。それぞれ厄介で理不尽な苦情に手を焼き、他人になど構ってられないのだろう。

よく聴くラジオ番組のメイン・パーソナリティーの女性がよく『やるしかないなら、やるっきゃないじゃん』と軽快に言っていたのを、いつしか自身のポリシーにしていた。

もしかしたら悲しみや悩みとは無縁のような彼女に少なからず憧れていたのかもしれない。きつといつでもそう言う声が出せるからこそ番組の進行を任されているのだろう。

同じ声だけの仕事でも、こんなに違うものなのかと藤花は嘆息する。

クジラの感謝の言葉だけが今は救いだった。

城戸貴春？

彼女の在学中にレオナルド・ダ・ヴィンチ展に赴いたことがある。平日だというのに思っていたより人が多く、足を止めての長時間の鑑賞は禁じられていた。

「教授は絵画にも明るいんですか？」

「実に心外だ。それよりも何故、君がいるのだ」

返答はない。勝手にしたまえと次の展示へ歩を進めると、そのあとを追って来た。

薄暗く、絞り込まれた照明に『受胎告知』が浮かび上がる。

思いがけないことだったのか、立ち止まった城戸の背に深月がぶつかる。

しかし、素知らぬ顔で彼は『受胎告知』の正面を惜しみなく過ぎ去る。深月は腑に落ちないという顔で絵の真正面に立ち、「何だか煉瓦の大きさもアンバランスだし、マリアの手がちょっと長過ぎる気が」と呟いた。その立ち位置を見て、城戸は眉をひそめる。実にじれったい。

次第に列は進んでいき、今更、引き返すことは出来ない。彼女は永遠にあの絵に対して曖昧で未完成な感動を抱き続けるのだろうか。考えると惜しいように思えた。彼女はたった数歩、行き過ぎただけなのだから。

パンフレットを見るとレプリカが別館にあることが記載されていた。

年甲斐もなく、手を握ることは気恥ずかしくて深月の鞆の端を掴むと半ば強引に別館へ連れて行く。

同じ絵でも、レプリカを展示している別館は空いていた。一通り貪り尽くされた骨に集る動物がないのと同じような理由なのだろう。

右斜めから絵を見てみたまえ。それだけ伝えたと城戸は近くにあ

ったソファアーに腰を下ろす。体を沈めて天井を仰いでため息を吐き、実に手のかかる学生だと悪態をついた。

「その絵は初めから飾られる場所が決まっていた。すなわち祭壇の立ち位置から右斜めに見るように作られたのだ。ダ・ヴィンチはそれを踏まえた上で、人がその方向から見て、不自然ではない描き方をした」

正面から見た時の違和感は払拭され、キリストを身ごもったことを告げる大天使ガブリエルと、それを静粛に受ける聖母マリアの受胎告知の場面がありありと彼女の眼前に広がっていることは聞くまでもなかった。

「素晴らしい絵を前にした時、我々の抱く感情は数百年前にその絵を見ていた人間が感じたそれと恐らく同じものだろう。現在と過去が絵を介して結び付くのだ。何故、大昔の絵画を必死で残そうと試みるか考えたことはあるかね。何百年先の人間とも繋がっていたいからだ」

人は誰しも繋がっていたいのだよ。耳鳴りがした。そして城戸はさざ波に揺られているかのようなまどろみに身を委ねる。

沢渡藤花？

クジラの電話を同僚の受話器がとることもあったが、沢渡の名を出すなり、回線が転送されるまでになっていた。何も知らない彼らは厄介なお得意様が出来てしまったのだらうと同情したが、知ったことではない。

クジラにとって自分は底の見えない深い穴なのだろうと思うようになっていた。どんな弱音を吐いても誰にもそれを知られることはない。冗談のような苦情を申しつけてくる人達もここにそういう捌け口を求めて電話をかけてきているような気がした。

最近、クジラの呼吸が乱れることがあり、不安を覚えてしまうが、今日は調子が良いらしい。

「もうすぐ産まれそうですねです」

クジラの言葉は、藤花の顔を自然と顔をほころばせたが慌てて、真顔を意識する。誰に見られているかわからない。

「当社としても心より喜び申し上げます」

馬鹿みたいだ。けれどその馬鹿みたいなことがずっと続けば良いと祈っていた。次にラジオに投稿する時、ラジオネームにクジラを名乗ってみるのも悪くないかもと思っては、苦笑する。

「胎児は受胎から8カ月で音を知覚出来るようになるそうです」

「存じております」

「この子は今、キリストが聴いていたのと同じ音の中にいる」 クジラの言葉に藤花は惹かれてしまう。

「でも物心つく頃には、私はもういない。きっと、この子は私の声を知らないまま育つことになる」

「返答しかねます」

「鯨の声はずっと遠くまで届くの、どうして私の声はこんな近くにさえ届かないの？」

今にも泣き出しそうなその声に気休めなんて言えなかった。

「当社では責任を負いかねますが、……、あたしに任せてよ。なんとかするからさ」

やるしかないなら、やるっきゃない。

城戸貴春？

時間はあまり残されてはいない。徐々に衰弱する彼女と、何も出来ずそれをただ見ているだけの自分。まるで検体と研究者そのものではないか。

死期が近いことは彼女が一番よくわかっていいるであろう。しかし、深月の関心はすでに胎児を産むことにしか向いていないように見えた。

それが彼女の命題であるとも言つように。これは非常に良くない傾向である。産んでしまえば、彼女は生きる目的を果たしてしまう。

けれど城戸にはわからなかった。彼女の為に何をしてやればいいのか。自分に何が出来なのか。検体を目の前にした時、彼は観察することしかしてこなかった。こんなにも齒がゆい思いをしたのは初めてである。

深月が検査に行っている間に城戸はベッドに積んである本を手にとった。

当時、彼女が熱心に取り組んでいた生物学関連の書籍や海の生き物の写真集、ルネッサンス美術の画集が多くを占めている。城戸の著作もあった。けれど、一番下にあったのは意外にも『王様の耳はロバの耳』という絵本だった。

中を開き、ページをめくっていくと穴に向かって王様の秘密を叫ぶ場面で、床屋の吹き出しを覆うように付箋が貼つてある。

『生きていて良かったことは』と二段にして書かれた繊細な筆跡は彼女のものである。付箋をはがして裏返すと、文字の配分を失敗したらしく無理やり詰め込んだ為の後半になるにつれて異様に小さく書かれているが、確かにこう記されていた

『死にたくないと思えたこと』

沢渡藤花？

なぜ鯨を名乗ったのか聞いたことがある。丁度昼休みの時間帯でも疎らだったことあり、自分で決めた取り決めに破って話しかけてみた。

「鯨は私のライバルなんです」

思いがけない返答に困惑する。しかし、そんな藤花を余所にクジラは、雄のザトウクジラは求愛の時に頭を下にして暗い海の底に向けて歌うんです、と。

自然と彼女の声に聞き入ってしまうことがある。そこには貝に耳を当てて、海を懐かしむような心地良さがあつた。

「まるで誰かに気付いて欲しくて『自分はここにいる。君はひとりじゃない』って叫ぶ寂しがり屋のように。私は、それに応える『クジラ』になりたかった。だってあの人は鯨にしか興味がないから。悔しいじゃないですか」

「あんた面白いよ、すっごく」

今まで聞き手に回るばかりで、彼女のことはある程度知っているつもりだけれど、彼女は私のことを何も知らない。この機会に少しだけ話せたら良い。そう思った。

「あたしは、ラジオが趣味でよく聴くんだ。『オーシャン・レディオ』なんて、知らないか。時々、投稿もしてる。あんたみたいに大層な由来もないようなラジオネームでね。まだ一度も読まれたことないけどさ」

「いやになっちゃってしまったりとかしないんですか？」

「しないよ。あたしはいつか、自分の言葉がラジオの電波に載って同じ周波数を持った誰かにきくと届くって、何の根拠もなく信じてるから。だから送り続けるの。それでもずっと送り続ける。あたしが無意味になんてしないから」

人はみんな、手探りで少しずつ自分の繋がりたい誰かと周波数を

合わせていく。そんな言葉を思いついたけれど、言わなかった。口にするにはあまりにナンセンスに思えた。

「あんたとなら、うまくやっていける気がするよクジラ」

「実に同感です」

昼休みの終わる音がする。

城戸貴春？

卒業論文の時期だった。城戸も自分のゼミ生の論文に曲がりなりにも目を通さねばならない。けれどそんな時間すら惜しまれた。

屋上に行くと言い出した深月に付き添う。快晴だが肌寒く、シーツが風にはためいている。街がパノラマのように見えた。

「明日から来ないで下さい。私の所為で仕事に支障が出てしまったら、その方が私には耐えられない」

大学に休暇を申し出るか、辞めることさえも視野に入れていたことを告げて、彼女は首を縦には振らなかった。最初からこの結末はわかっていたことだった。

「君はいつもそうだ。何だって一人で決めて、一度決めたら人の話には耳も貸そうとしない。独りでどうにか出来るとでも思っているのか？ 理解に苦しむ。実に、実に愚かしい限りだ」

なんだ、と深月は言葉を切る。私はこの先を知っている。だからその先を言っな、と城戸は祈った。まるで彼女が城戸の研究室を訪ねて来た日の再現だ。その先を聞いたら自分は食い下がることをやめるだろう。深月が遠くへ行ってしまふ。それこそ耐えがたい。

「やっぱり教授が一番、私のことを理解してくれているじゃないですか」

雑音だ。

最終話

困ったことが一つある。ボイスレコーダーに録ったクジラの言葉を誰に届けて良いか藤花は知らない。もしかしたら、録音した中に相手の名前があるかもしれないが、勝手に聞くわけにもいかず途方に暮れていた。

仕事は、彼女からの連絡が途絶えてからしばらくして辞めてしまった。

新しい職場にも慣れた頃、帰宅しようとタクシーを拾った。車内に備え付けられたラジオのニュースで連続婦女暴行事件の犯人が捕まったことを知る。

保護された女性の話では路地裏に連れ込まれたところを通りすがりの黒いマフラーの男性が容疑者を幾度か殴りつけて気絶させ、その場を後にしたという。事件の足取りを追った地図が現場付近に捨てられていたことを受けて警察は事件との関連を捜査していることが述べられた。

運転手がラジオのつまみを捻る。新米なのか手際が悪い。運転手の登録証を見ると『神崎豊』とある。

周波数が合い、聞こえてきた奇妙な旋律に神崎はなんだこれ？故障ですかね、と首を傾げる。

『へえ、珍しいね。大学の教授さんからリクエスト来てるよ。城戸貴春って有名な人じゃない。権力とか地位ある人大好きな久遠ディレクターが考えそうなことだね。ヤラシー。まあ、やるしかないならやるっきゃないんだけどさ。ふーん。これ、鯨の鳴き声なんだ。たまには音楽以外のナンバーも悪くないね。あたし、こういうの好きだよ』

ザトウクジラは海の底へ向けて歌うという言葉が頭をよぎる。きつと彼女は闇の中にいた。引き上げてくれる誰かの声が聞こえてくるのを息を潜めてずっと待っていたのだ。

幼い頃に読んだ絵本のことを思い出す。床屋が一人では抱えきれずに深い穴の底に零した秘密が、風に乗って人々の耳に届いてしまふ物語。同じように寂しい気持ちは穴に叫ぶだけでは収まらなかった。誰かに気付いて欲しくて、苦しくて、それでも愛しくて、だれど不器用だから彼らは鯨を介してやっと伝えるのだ。

きつと今、彼は自分と同じ思いを抱いている。

藤花は神崎に見えないように静かに泣いた。

奥行きのある、穏やかだがどこか悲しげな深海の歌が響き渡る。

死んだように生きて、二ヶ月目の始まりの朝は配達人と共にやって来た。しんしんと雪が降っていた。

講演会の依頼も全て断った。拭えない虚しさの原因を求めて、ザトウクジラのテープをラジオ局に送りつけた。喪失感は深まるばかりだった。ちょうど、植物を根から引き抜いた時、土ごとえぐれば大きな穴が出来てしまうように。

届いた小包を机の上に無造作に投げ出し、夜になってようやく手にとる。差出人の欄には杉並区の文字と身に覚えのない女性の名前が書いてある。黒いマフラーを畳んで脇に置き、取扱注意のシールを確認してから封を破る。

治りかけの、折れた指がズキズキと軋むように痛むと思い出す。

「どんな動物にもテリトリーはある、か」

うつすらと隈の浮かんだ眼を細め、床に散らばった連続婦女暴行事件の新聞の切り抜きを睨むと、踏みにじる。実に忌々しい。

看護師の話によると、彼女はあの日を境に、頻繁にどこかに電話をかけるようになったという。夫ではないかと噂していたが、くだらない憶測だ。

「彼女は間違いなく聖母だった」

ボイスレコーダーとその使い方を記した説明書が入っていた。どうやら聞け、ということらしい。

再生ボタンを押す。しばらく雑音が続いた後、録音されていたメッセージに自然と涙が零れ落ち、その場に崩れる。先ほどまで自分の中にあつた黒々とした感情がすっと抜けるのを感じる。

何故今更になってこんなものが届いたのか、彼には見当も付かなかった。

『私の声は聞こえますか』

嗚咽が止まらず、込み上げてくる思いは上手く言葉にならない。押し込めていた感情が今になって溢れだすようで胸が苦しかった。

同時に、どんな美しい肖像を前にしようとも、足を止めることは許されないのだと改めて実感する。進まなければならぬ。

明日になったらもう一度、粉ミルクの温度調整に挑戦しよう。まずはそれからだ。

彼女の祈りに応える為に。だから今夜くらい、降り注ぐ雪を仰いで君を忍ぶ。

ボイスレコーダーを握りしめ、城戸は生まれたばかりの幼子のように、ただ泣き喚いた。

『あなたの祈りが私に届くこと。それがわたしの祈りです。呼吸をしてください。生きて』

オーシャン・レディオに周波数が合う。最初は告知からで、城戸貴春が久しぶりに東京での講演を行うことを告げていた。以前、未婚であるはずの彼が子供を連れて会場に現れたことが話題を呼んだが、一切そのことには触れず、質問されても「問題はない筈だ」と一蹴したという。

ライブ情報、交通情報が終わるとリスナーからのメールを読み上げるコーナーが始まる。

パーソナリティーとゲストがひとつひとつに面白おかしくコメントを付けていく。

『次のお便りは杉並区のラジオネーム、「ザトウクジラの友人」さ

んからで』

バスは当然、雪のように舞う桜の下を抜けそうにない。

【了】

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9034o/>

マリアノイズ

2011年7月3日03時37分発行